

学校・家庭・地域の効果的な連携について

－見守り隊の活動を通して－

田原本町立北小学校 教諭 上村 謙 至
Kamimura Kenji

要 旨

学校・家庭・地域の連携の重要性が指摘されて久しい。本校でも、全国で多発している登下校中の児童が被害に遭う事件を契機に地域ボランティアによる登下校中の児童を見守る活動が始まった。その活動は6年目を迎え、停滞することなく地域の活動として定着している。そこで、この登下校ボランティア活動（見守り隊）を通して、学校・家庭・地域の思いをそれぞれ探り、そこから見えてきたことをもとに、学校・家庭・地域の効果的な連携について考察した。

キーワード： 登下校ボランティア活動（見守り隊）、地域で育てる、あいさつ

1 はじめに

教育基本法の改正で、「学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力」が条文で規定された。子どもが学校以外の地域社会の様々な人々と出会い、多様な価値観に触れることは、他人への思いやりや他人を尊重する態度の育成にとって必要である。

本校においては、地域住民による登下校ボランティア活動が行われている。しかし、学校・家庭・地域それぞれが登下校ボランティア活動に対してどのような意識をもっているのか、登下校ボランティア活動の現状についてどのように考えているかは詳しく検証できていない。

そこで、現在、北小学校区で学校・家庭・地域の三者が連携を深めながら取り組んでいる登下校ボランティア活動の有益性を確かめ、学校・家庭・地域の効果的な連携について探りたい。

2 研究目的

登下校ボランティア活動が、児童やその保護者、ボランティア本人に与える影響などを、アンケート調査などを活用して探り、ボランティア活動を通しての学校・家庭・地域の効果的な連携の意義を考える。

3 研究方法

- (1) 登下校ボランティア活動（見守り隊）に設立当時からかかわっている人から聞き取りを行い、ボランティア活動の在り方について考察する。
- (2) 登下校ボランティア活動（見守り隊）に関するアンケート調査を、児童、保護者、登下校ボランティアにそれぞれ実施して、ボランティア活動の有益性を検証する。
- (3) 登下校ボランティア活動だけでなく、ボランティア活動が一般的、普遍的に普及していく

ための手立てを考える。

4 研究内容

(1) 北小学校における登下校ボランティア活動について

北小学校区の登下校ボランティア活動（以下見守り隊）は、6年前の奈良市立富雄北小学校の児童誘拐事件を機として、田原本警察署や地元の駐在所の依頼を受け、北小校区の自治会の話合いの中で設立が決められた。長く続けられるようにするために、以下の3点にポイントを置き、組織を作った。

- ・活動する者は、リーダーシップをもっており、自由な時間がとれる者とする。
- ・組織や仕事については、各地区で自由に編成し、活動できるようにする。
- ・定期的に会合を開き、情報交換を行う。

また、取り決めたことや組織の内容については、最初の時点で文章化した。文章化により、組織や活動内容が明確になり、見守り隊の各地区の世話役である自治会長の交代のときの引き継ぎなどがスムーズにいくことにつながった。

見守り隊は、ジャンパーとたすきを身に付け、児童に寄り添って登下校する形（図1）で行われている。ただし、運営の方法は、各地区に任せられており、農家の方のボランティアが多い地域では、登下校時に通学路に隣接する畑で作業をし、児童の安全を確認している。ボランティアの少ない地域では、保護者が当番で活動している場合もある。また登校のみ活動・下校のみ活動など、他にも形態があり、一律ではない。そして、現在の活動の情報交換を行い、これからの活動を考える場として、「子どもを犯罪から守る会」（図2）が年に数回開かれている。この場に参加しているのは、各地区の見守り隊の代表（主に自治会長）、学校、PTAだけではない。児童の安全を守るために必要であると言うことで呼びかけに応じて、地域の警察、役場の代表も参加している。

以上のように、北小学校区では、①自治会の組織力を生かし、すぐに対応し、②活動の方針

・内容を文章化することで組織のすべてを明確にし、③各組織（学校・PTA・警察・役場）を巻き込むことで、「見守り隊」というボランティア活動を継続して推進させることができたと考えられる。

(2) アンケート調査

現在の見守り隊について、また今後の見守り隊のありようについて、学校、家庭、地域の思いを探るために、アンケートを実施することとした。地域ボランティアの登録者、保護者、児童、教職員を対象としてアンケートに協力してもらった。その結果をもとに、見守り隊の現状を見つめ、ボランティア活動の有益性を検証することにした。



図1 下校の様子



図2 子どもを犯罪から守る会

(回答者数 地域ボランティア38人 保護者148人 児童230人 教職員19人)。

ア 見守り隊の意識に関する項目について

「登下校ボランティア活動（見守り隊）をすることで、生活のはりあいが出ましたか。」「登下校ボランティア（見守り隊）についての思いを聞かせてください。」という2つの問いに対して、「生活にはりあいが出て元気になった。」「やりがいを感じる。」と回答した地域ボランティアは半数以上であった。見守り隊が、地域の人々に新たな「はりあい」や「やりがい」を与えていることが分かる。感想の中には、「すくすく育てている子どもたちに会えて、自分に元気をもらって大変幸福に思う毎日である。」という意見もあり、そのことから、見守り隊の活動が地域活動の活性化の一翼を担っている効果があると考えられる。ただ、「雨の日、寒い日、暑い日などつかれる。」や「日によっては、負担に感じる時もある。」という意見もあり、これからもこの活動を継続していくためには、今のやり方だけにこだわることなく、見守り隊の肉体的、精神的な負担が少しでも軽減されるような方法を考えていかなければならない。

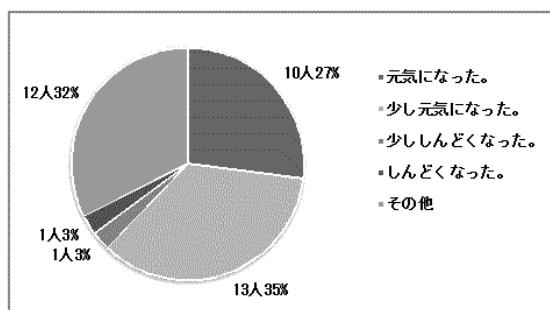


図3 生活のはりあいについて

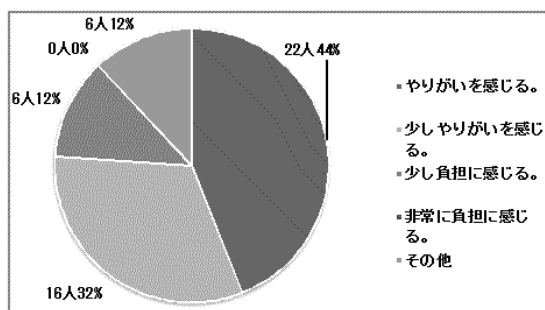


図4 見守り隊についての思い

イ 保護者の見守り隊に対する意識に関する項目について

「登下校ボランティア（見守り隊）について、どう思いますか。」という項目に対し、保護者の約9割の人が「役に立っている。」と答えている。また、感想の中には、「感謝している。」や「未就学児がおり、ボランティアの方が活動して下さると助かる。」など感謝の気持ちが書かれている文面が多く、保護者にとって、見守り隊の活動が、意義のあるものだとして受けとめられていることが分かる。しかし、ここでも、「天候など、高齢者の負担になっていないだろうか。」という見守り隊の健康面を気遣う意見や、「感謝はしているが、(児童の)自立心が欠けているのではないか。中学校に行ったらバラバラになるのが心配です。」といった児童の登下校活動で身に付けるべき力についてこないことについての意見もあった。児童の安全と児童の登下校を通して獲得する成長について、学校・保護者・見守り隊で考えていかねばならないことが課題として出てきている。

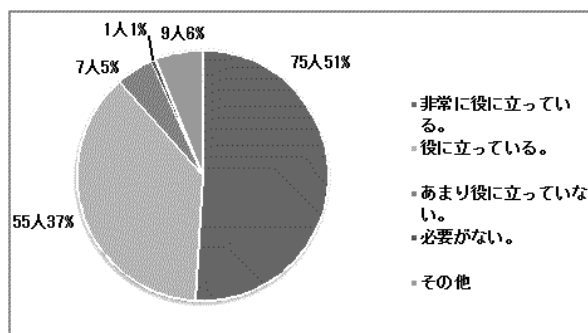


図5 見守り隊について

「あなたは登下校の時、部団のお兄さんやお姉さんの注意を聞いていますか。」「あなた

ウ 児童の見守り隊に対する意識に関する項目について

「あなたは登下校の時、部団のお兄さんやお姉さんの注意を聞いていますか。」「あなた

は登下校の時、部団の子どもたちのめんどろを見えていますか。」という2つの項目に対する児童の回答の結果を見ると、低学年（1～3年）、高学年（4～6年）で共に、ほとんどの児童がお互い協力して登下校しようとしているという回答結果が出た。実際に、登下校時にあった道草や田畑へのいたずらなど生徒指導に関わることがほとんどなくなり、見守り隊の人たち（大人）がいることで、周囲に集団での行動の意識が高まっていることが分かる。しかし、児童の様子について保護者や見守り隊から、厳しい指摘が出てきている事実がある。「見守り隊に頼り切り、部団長や副部団長が下級生に注意をしない。」や「子どもたちは、先生の目の届かない所では言うことを聞いてくれない。」などの意見もあり、学校で、見守り隊の意義、地域や保護者の思いを伝えたり、自分たちの行動を振り返ったりする指導を行い、児童の意識を高めていかなければならない。

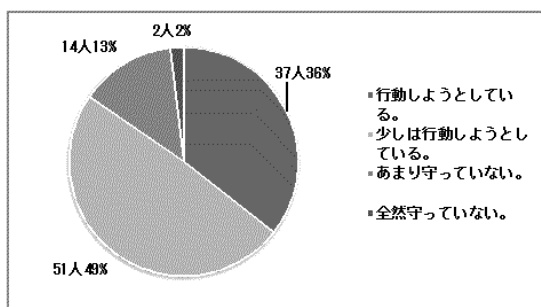


図6 部団登校について（高学年）

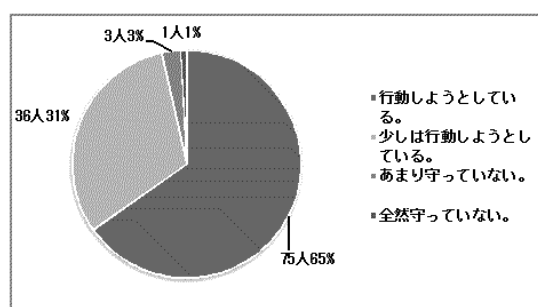


図7 部団登校について（低学年）

エ あいさつについての意識

「地域の人とあいさつしていますか。」「登下校ボランティア活動（見守り隊）をやるようになって、自分自身は変わりましたか。」という2つの項目に対して、低学年、高学年ともにほとんどの児童が、地域の方とあいさつができると回答している。また、登下校ボランティアも、7割近くの人が地域の児童とあいさつができるようになったと回答している。この見守り隊の取組が、地域の人と児童を近付ける手助けをしていることがうかがえる。

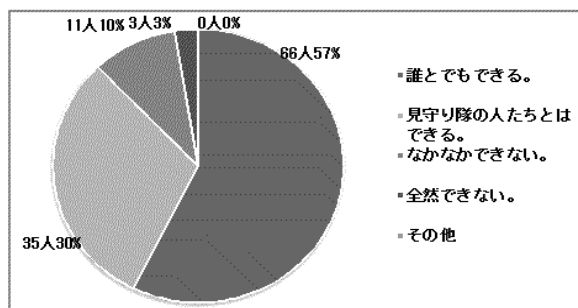


図8 あいさつについて（高学年）

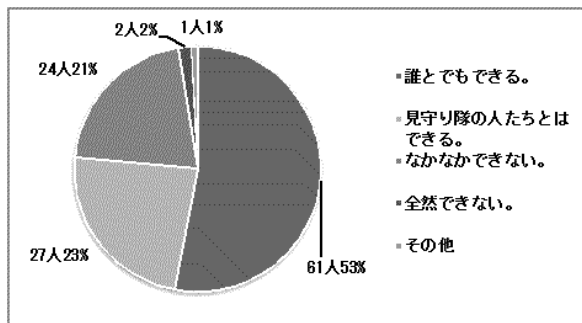


図9 あいさつについて（低学年）

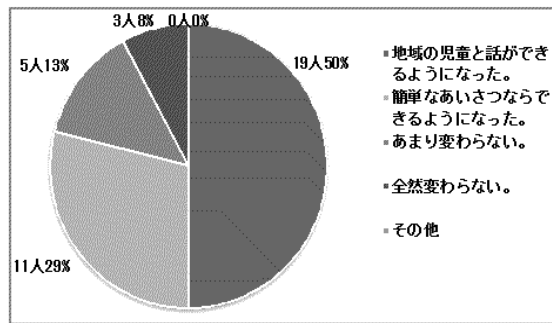


図10 あいさつについて（見守り隊）

オ 感想・意見について

「登下校ボランティア活動（見守り隊）に、ご意見があれば書いてください。」という項

目については、保護者からは数多くの感謝の意見が寄せられている。登下校への安全と安心が得られることについて書いてあることが多い。一方で、児童や保護者が見守り隊に頼りすぎることへの危惧を指摘しているものもある。見守り隊が当たり前のこととなり、児童の自主性や保護者の感謝の気持ち（見守り隊に対して）が失われていくことへの心配があるようだ。

見守り隊の中には、児童との対応のしんどさ（歩く速度についていけない、言うことを聞いてくれないなど）を挙げた回答がある一方で、児童の元気な姿に触れることができるのはありがたい、といった回答も複数見られた。

教職員からも、保護者同様、「安全が得られる。」、「いたずらや道草が減った。」というところで、感謝の気持ちを伝える回答が多かった。

学校としても、見守り隊の活動に甘えることなく、定期的に部団の集合場所の集合状況、登下校の様子の確認などを行っていくことが大事である。そのことで、児童の様子を知り、登下校時の直接指導ができ、見守り隊との連携や信頼関係がより深まっていくと考えられる。

『学校・家庭・地域とのかかわり』で大切だと思うことを自由に書いてください。」という項目においては「かかわり」については、「情報の共有・公開が大事である。」と複数の方が回答していた。また、「あいさつを含めコミュニケーションをとる。」ことをあげる人もいた。そして、それぞれのスタンスについては、「学校・家庭・地域がそれぞれ自分たちの基盤をしっかり固めた上で、依存せず、連携することが大事である。」と考える人もいた。

以上のことから考えると、先に述べたように、学校として「地域に出向く。」ことが大事である。学校が「待つ姿勢」である間は、連携の深化は望めない。学校から地域に出て行かないと、地域・家庭（保護者）とのつながりは深まらない。「学校開放」は、地域や保護者に自由に学校に出向いてもらうだけではなく、学校側が、積極的に地域に出かけることまで進めていかなければならないと考える。

(3) アンケート結果の考察

見守り隊からの聞き取り、教職員・児童・保護者・見守り隊のアンケートの結果から、見えてきた点は以下のとおりである。

ア 三者の連携による効果

「学校・家庭及び地域住民等の相互の連携協力」の中では、相互が連携していくことで、それぞれの課題をこの活動の相乗効果によりクリアしていくことを目指している。本校での見守り隊の取組で考えてみると、やはり活動の相乗効果により、メリットを得ていることが分かる。

学校においては、児童の安全な登下校や地域とのつながりを得ることができている。児童は地域の人との出会いにより、自分を地域の一員として地域の人たちに認識してもらえるとともに、自ら地域の人たちに働きかける活動も起こしている。

今年度は、運営委員会（児童会）が中心となって

学校行事（文化鑑賞）に地域ボランティアを招待し、共に楽しむことができた。そして、卒業式前には見守り隊の方を招き、全校児童手作りのカレンダーの贈呈や歌の披露で、日ごろ



図11 全校児童による歌の披露

の活動に対して感謝の意を表した。(図10) また、教職員も登下校指導や家庭訪問の行き帰りなどで地域の人たちと話をするなど地域とつながることで児童の話題を共有したり、地域の人をゲストティーチャーとして学校に招き、教育活動に参加してもらったりもしている。その中で、児童は、米作りやスイカ栽培などの地域の産業に従事する人、唐古鍵遺跡の保存に携わる人など、地域(故郷)を大事に守っていこうとする人々の思いに触れることができている。

家庭(保護者)においては、学校同様、児童の安全な登下校と地域のつながりを得ることができている。アンケートの回答を見ると、地域ボランティアに感謝し、見守り隊の活動の有効性を感じることで、地域(自治会)の活動に積極的に参加するようになった保護者もおられる。また、登下校の際、見守り隊や他の保護者との触れ合いの中で、保護者(親)が自分達だけで児童を育てているといったある種の孤立感をもつことなく、地域の人たちみんなで児童を育てているのだという意識をもつことができる。

そして地域においては、地域の活性化を得ることができている。この活動を通して、学校や家庭(保護者)から地域(自治会)の活動への参加や協力を得ることができる。また、それぞれの地域(自治会)が、「子どもを犯罪から守る会」という情報交換を得る場を持つことで、より広がりを見せ、つながりもより深く強固なものとなる。そして何より地域住民の一人一人が、見守り隊の活動によって「地域の子どもの子育て」に参加することになり、生活のほりあいやりがいを得て、地域の活性化を担っていくと考えられる。

イ あいさつの視点から (あいさつ→情報交換→連携)

最近、児童があいさつをしないということが問題となっている。それどころか、大人の間でも御近所同士でもあいさつをしないということを知ったりする。見守り隊の活動をあいさつの視点から、振り返ってみたい。

アンケート結果を見ると、児童・地域ボランティア・教職員とも、見守り隊の活動を通して「あいさつができるようになった。」と回答する傾向がある。そして、アンケートの感想を見ると、「あいさつ」から「会話を深めることができるようになった。」ことや「地域で出会ったときに話ができるようになった。」など一歩進んだ行動もうかがえ、地域ボランティアからは「現在の子どもたちの様子がかいま見られる。」「自分の孫と比較できてよい。」、教職員からは「子どもたちの地域での様子を聞けるようになった。」などの回答があった。児童と地域、地域と学校がつながりを持ち始めている。このように、情報交換をし、お互いに知るといった活動に進んでいき、それが、信頼関係を生み、「連携」につながっていくと考えられる。見守り隊は日常的な活動であるので、つながりが一時的なものとならず、よりつながりが深まっていくのではないかと考えられる。

ウ ボランティアの後継者の問題

地域ボランティアからは「体力的にしんどくなった。」「子どもたちの歩行スピードについていけなくなった。」という意見が出され、「ボランティアの後継者をどうするのか。」と心配する声もある。一方、保護者からもボランティアの健康を気遣う声が多く出された。実際、夏の暑い日も、土砂降りの日も、雪の降る日も、地域ボランティアは児童と一緒に歩いている。

保護者アンケートにある「子どもが卒業した後、見守り隊の活動に参加できるか。」という問いには、参加したいという気持ちはあるが、仕事などで、時間の都合がつかず、無理で

あるという回答が多数を占めている。このままいくと、見守り隊を続けられない人が増え、新たに加入する人もなく、人数が減って、組織が弱体化するという図式ができてしまう。

見守り隊の間では、ボランティアに参加できそうな人を自治会長を中心として、長期的な視野のもと絶えず地域の中で探している。また、保護者の中には、「今は無理でも、自分がリタイア（退職）したらやってみたい。」など、仕事や子育てが落ち着いたら見守り隊の活動をやってみたいと回答する人が多かった。さらに、地域の活動（自治会）にはほとんどの保護者が参加している。このことを見れば、今すぐは無理であっても、将来的には、参加ができると考えられる。そして、児童の間に、「自分たちは地域の人たちに守られている。そして、育てられている。」という意識を根付かせていければ、児童もゆくゆくは地域を担う人材として育っていき、この活動は十分に継続していくのではないだろうか。

エ 子どもたちの自主性の問題

保護者、地域ボランティアの両方の回答に、「見守り隊に頼り切り、上級生が下級生を注意して見ようとする自主性が薄れている。」「危険に対処する力がなくなっている。」「大人がついていることで、上級生が下級生や周りを見ず、責任感が養われていない。」など、集団の中で自分たちが責任をもって活動するといった自主性が育ってきていないのではないかという意見があった。児童自身は、集団の中での自分たちの役割を果たしていると回答しているが、大人の中から見ればまだ十分でないと思われる面がある。確かに、現在在学する児童は入学した時から見守り隊が存在し、見守り隊が良い意味でも悪い意味でも当たり前の存在となっている部分がある。そこで、「子どもを犯罪から守る会」の情報交換の場において、児童の様子（特に上級生の集団での指導ぶり）について話し合っている。そして、その場では、「見守り隊は見守るだけではなく、指導することも必要だ。」「児童がメインになるよう見守りたい。」「児童に任せるべき所は任せて、後ろから支える。」など新たな提案も出てきている。これらの提案を踏まえ、今一度、児童に見守り隊の意義を教え、感謝の気持ちをもたせ、地域の人々の思いを受け止めさせることが、児童の「自分たちは温かく守られているし、期待されているんだ。」という意識につながり、自主性を育てる第一歩になると考える。そして、その役割を学校・保護者が担っていかなければならない。

(4) ボランティア活動の一般的、普遍的な広がりについて

「無縁社会」といった言葉に代表されるように、地域、家庭などでの人々の孤立化が目立ち始めている。この状況を打破し、人々をつなげていく役割を担うのが、地域ボランティア活動であると考えられる。地域ボランティア活動を広げていくことで、人々は深くつながっていける。そこで、本校の見守り隊の活動から、ボランティア活動の一般的、普遍的な広がりについて考えていきたい。

本校での見守り隊の活動が継続して行われている最大の理由は、地域の自治会長の強力なリーダーシップであると考えられる。旧村の自治会の積極的な活動が、新興住宅地の自治会を巻き込む形で、この活動が継続、発展してきた。したがって、新興住宅地が多数を占める校区では、同様の活動ができるのかということが問題となる。このことについては、新興住宅地において地域おこしが積極的に行われつつある（例えば、盆踊りや地蔵盆の復活など）現在、地域おこしの推進役を担ってもらえる人材がいるはずである。

今回の研究では、行政（町教育委員会）の方と研修を重ねることができた。その中で行政のつながりの広さ・深さを知ることができた。町内の各自治会とのつながり、そして多様な

社会教育団体とのつながりがある。子ども会から、高齢者クラブまで、あらゆる世代とのつながりがある。そして、「地域おこし」として、それぞれの活動を進めていくノウハウももっている。人材バンクとしての機能を有し、それぞれの団体をうまくつなぎ、ネットワーク化を進めることもできる存在と考えられる。そこで、学校・家庭・地域をより深く機能的に連携させるために、行政を巻き込むことが大事である。

このように、「地域に、人材がいる。」、「行政が、人材を把握している。」、「地域の担い手である家庭がある。」、「そして、地域と家庭を子どもを通してつなぐことのできる学校がある。」という現実をふまえ、学校が核となって、行政と協力しながら、家庭や地域のネットワーク化を進めていくことができれば、ある問題に直面したときに、それが起爆剤となり、新たな地域活動が生まれ、その活動が進んでいくのではなからうか。行政の協力を得て、学校、家庭、地域の三者が力を合わせれば、大きなうねりをおこすことができるはずである。

今回、この見守り隊のことと行政側から見た連携についての報告2本を、田原本町青少年健全育成協議会の児童・生徒指導育成部会の中で発表した。この部会には町内にある保育所、幼稚園、小学校、中学校、高校の生徒（生活）指導担当が出席している。その中で、幼稚園の方から、「地域に出かけて行って活動をしたい。そのために、どうすればいいのか。」という意見が出されたとき、すかさず役場の方から、「そういうときは、役場に声をかけてください。人材も知っているし、協力もできます。」という意見をいただいた。まさに、学校、幼稚園、保育所と地域との連携を行政がバックアップするという形ができていくのである。また、この部会のことで言えば、前年度までは「あいさつ」をキーワードに各校・園・所の取組を情報交換してきた。そして、今年度、「あいさつ」の取組だけでは、「あいさつ」だけで終わり、広がりが無いという反省から、「つながり」を求めていく取組を始めていこうということになった。行政からは、青少年育成のための活動（夏休みの野外活動、星の観察など）の紹介があった。学校外での子どもたちのいきいきとした様子や学校では見せていないような様子を知ることができ、貴重な情報交換ができた。

この部会での「つながり」という視点は、学校、家庭、地域の連携にも大いにつながってくる。学校側から言うと、地域の活動、また子ども会活動などに積極的に関わっていくことで、より連携が深まる。今まで、学校の活動に、保護者や地域に協力してもらい、効果をあげると意識が強かったように思うが、学校が地域に出向き、家庭や地域の活動に協力することでの連携を深めることが三者の活動をより活性化させることになる相乗効果を得られるのではなからうか。学校・家庭・地域それぞれがメリットを得る、そして一方に片寄らないような関係が必要である。

5 おわりに（地域の方の一言から）

最後に、ある地域ボランティアからいただいた言葉を紹介したい。

「毎日、子どもたちの様子（顔）を見るだけで、元気がもらえるねん。家には高齢者しかいないので、子どもたちの顔を見ると元気がもらえ、親の介護もがんばれるねん。感謝したいのはこっちの方や。」

子どもたちは、地域に守られ、地域に育てられ、次の地域の担い手になっていく。しかし、子どもは守られるだけの存在ではなく、地域の一員として、立派に地域に対して貢献しているのである。

